

---

書評

---

三好千春著

『時の階段を下りながら——近現代日本カトリック教会史序説』

川本 隆史\*

ひらがな混じりのソフトな主題が、お堅い名詞を書き連ねた副題との好対照をなしている。最初に題名を知った段階では、『時の階段を下りながら』は恐らく聖句か文学作品を典拠とするフレーズだろう……といった憶測を下すにとどまっていた。だが書評を引き受けた以上、メインタイトルの出どころを見つけ出さねばなるまいと思立って、リサーチを開始する。

まずは、懇意にしているエディターの加藤愛美さんを介して、『福音宣教』編集部の鈴木敦詞さんに書名の由来を尋ねてもらった。本書のもととなった雑誌連載(同誌 2018 年 1 月号～2019 年 12 月号)を仕かけ、単行本の産婆役を務めた鈴木さんより、即座に次のような回答が届く。

「三好先生がリヴァプールの大聖堂にある、地下のクリプタへ行く螺旋階段をおりてらっしゃったとき、あたかもそれが教会の過去の歴史をくだっている(さかのぼっている)ことであるかのような印象を受けられたそうです。そうしたご経験からこの書名となりました。」

他所から借りてきた言い回しではなく、敬虔な信仰者の実体験に裏打ちされた絶妙な比喻表現だったのだ。こうなれば、ご本人に詳細をうかがうに如くはない。不躰を顧みず(いちど南山大学でお会いしただけのシスターに)直撃取材を実施したところ、頂戴した懇切丁寧な説明がしごく腑に落ちた。会員諸姉兄にこれをそのまま提供するのが、評者の責務というものだろう。

「リヴァプールの大聖堂は、クリプタ部分は戦前に造られた昔ながらのものなのですが、上の聖堂部分は、第二バチカン公会議以降にできた非常にモダンなもので、それをつないでいたのが、かなり長い螺旋階段でした。カトリック教会は第二バチカン公会

議という大きな改革でいろいろ変わりましたが、同時に、過去の遺産を土台に、そことしっかりとつながりながら存在し、今も動いています。／そうした教会の歴史が、あの螺旋階段と重なり、あたかも歴史の階段を下りていくような、そんな感じがして非常に印象的でしたので、それに触発される形で、あのような題名にしてみた次第です。」

改めて本に目をやると、表紙カバーに螺旋階段が描かれていることに気づく(絵心のある鈴木敦詞さんの自作だそうだ)。リヴァプールのメトロポリタン大聖堂のホームページ(<https://liverpoolmetro cathedral.org.uk/>)も、教わっている。

もう少し表題にこだわりたい。《時の階段を下りながら》、《近現代日本カトリック教会史》の正負の遺産と課題とをきっちり見極めようとする著者の姿勢から、私は敬愛する精神史家の教訓をついつい連想してしまった。

「壁につき当たったら後を向いて見るとよい場合がある。過去の歴史的経験が広く眼前に拡がっているので、つぶさにそれらを検討することが出来る筈だ。[……]いくら「八方ふさがり」でも上下は空いているだろう。最小限、下の方に掘ることは出来る。深さへの到達だ。歴史に対する態度もそういう風でなければならないように思う。」(藤田省三「断章」序、『現代史断章』、未来社、1974年『著作集3』、みすず書房、1997年、viii)

カトリック教会のみならず、日本社会の現状がどれほど「八方ふさがり」であろうとも——螺旋階段を下りるように！——「下の方に掘ることは出来る」。第二バチカン公会議の「前」と「後」の問題群に照準を定めた教会史家は、こうした「深さへの到達」を断行する。すなわち、「前」については「幕末の「再宣教」開始以来、日本のカトリック教会がぶつかってきた問題はどのようなもので、それによってどのように教会が形

---

\*かわもと たかし (元・国際基督教大学)

作られてきたのか、という問い(12頁)と取り組み、「後」に関しては「第二バチカン公会議の精神」を、公会議後にどのように日本の教会は受肉していったか(11頁)を追跡しようとする、そうした骨太の歴史探訪の労作を私たちは手にしたのである。

以下に目次を掲げる。書き手が教会史という《時の階段》のどこで立ち止まり、そこでどのような問題群と向き合おうとしたのかを、23個の見出しが端的に示してくれる。さらに33頁におよぶ年表と地図は、この史書に豊かな奥行きを与えている。

- 1 日本のカトリック教会と第二バチカン公会議
- 2 「ミカド」とキリスト教
- 3 パリ外国宣教会の宣教活動(一)——邦人司祭養成
- 4 パリ外国宣教会の宣教活動(二)  
——巡回宣教師の活躍
- 5 日本人男性信徒の活躍
- 6 女性信徒たち
- 7 分水嶺としての一八九〇年(一)  
——欧化主義の影響
- 8 分水嶺としての一八九〇年(二)  
——「宗教」・天皇・帝国憲法
- 9 分水嶺としての一八九〇年(三)  
——「教育勅語」とキリスト教
- 10 分水嶺としての一八九〇年(四)  
——長崎教会会議
- 11 日清・日露戦争と日本カトリック教会
- 12 二〇世紀初頭の宣教不振打開策  
——日本人司祭・信徒を中心に
- 13 「第四階級」からの脱却を目指して
- 14 神社参拝問題
- 15 カトリック教会と「忠君愛国」
- 16 日中戦争と日本カトリック教会
- 17 日本天主教教団
- 18 日本占領期のカトリック教会
- 19 第二バチカン公会議前夜の教会
- 20 第二バチカン公会議と日本カトリック教会(一)
- 21 第二バチカン公会議と日本カトリック教会(二)
- 22 第二バチカン公会議と日本カトリック教会(三)
- 23 一九九〇年代以後——開かれた教会に向かって

【参考文献】

【あとがき】

【付録】年表／日本教区の変遷地図

残りの紙数を、抜き書きと短評にあてる。

第4章から。

①「巡回宣教師たちは、まだキリスト教に対して邪教観が残る明治期に、さまざまな辛苦と喜びを味わいながら、日本各地を精力的に歩き、地道で粘り強い宣教活動を行いました。そういう意味では、近代日本カトリック教会の土台は、パリ外国宣教会宣教師たちの、祈りと愛と忍耐によって築かれたと言えるでしょう」(34-35頁)。

「再宣教」開始以降の日本カトリック教会史の階段を伝って、その最深部＝「土台」に至り着いた著者ではあるが、歴史家の慧眼をもってこう補足することも忘れていない——「巡回宣教師が巡回する際には、日本人伝道士が同行して宿泊や「演説会」などの手配を行ったり、日本人信徒リーダーが彼らを自分の家に泊めたり「演説会」のために人々を集めたりするなど、日本人信徒たちも宣教師と協働していた」(35頁)と。

第6章の結びでは、孤児たちの養育活動(「子部屋」)を始めた女性信徒らの《階段》に下り立とうとする。

②「浦上の人々は彼女たちが共同生活をしていた納屋を、「女部屋」と呼ぶようになり」(47頁)、「江戸時代以来のキリスト教への偏見、差別が根強く残る地域で、それぞれの地に密着した女部屋の女性たちは「天主様のために働く」ことを求め、素朴に、今、目の前で苦しむ者を助け、その結果、彼女たちは地の塩として、普遍的な隣人愛を生きる者となりました」(48頁)。

《ジェンダー》と《ケア》(＝苦しむ者を助ける営み)という観点が加わることにより、教会の歴史を探究する視野がより一層広がったのは間違いない。

第13章は「忘れかけられて」いる思想家・岩下壮一の傍らに立ち止まる。

③「カトリック思想を日本人として咀嚼し、西洋からの借り物ではなく、日本語でカトリック思想を思索して語ろうとした岩下壮一の姿勢と努力から、今の教会は学ぶべきことがあるのではないかと思います。私たちは岩下壮一を正しく評価することが、未だにできないているのかもしれませんが」(102頁)。

この案件については、加藤和哉さんを代表者とする科学研究費プロジェクト「近代日本思想史におけるカトリック思想の展開とその影響」が岩下らの再評価に取りかかっている。折りよく、彼の弟子の選集も文庫に収められた(『文学者と哲学者と聖者 吉満

義彦コレクション』文春学藝ライブラリー、文藝春秋、2022年）。

第14～17章にも、数々の重大な指摘があふれている。

④「この指針 [= 1936年に布教聖省が公布した「祖国に対する信者のつとめ」] が、神社参拝を「宗教的行為」ではなく「愛国的行為」として肯定したことは、愛国心の名の下に、教会が日本国家にからめとられる一要因となったと思われまます」(116頁)。

⑤「[当時の日本] 社会で語られていた「愛国」、「愛国心」には、パトリオティズムとナショナリズムの混同や、他民族への憎悪や自民族の優越をあおったり、夜郎自大な傲慢を増長したりするものがいろいろと含まれていたのです。／教会はそうした言葉の中身への吟味が不十分なまま、教会の教えに基づくつもりで、また、当時の日本人の一員として「愛国」という言葉を使う中で、日本社会の空気に取り込まれ、自らも同調して、その「愛国」の中身がずれていったのではないのでしょうか」(129頁)。

⑥「こうした[アジア・太平洋戦争下]に教会が受けた迫害や、不断に厳しい監視状況に置かれていた信徒の苦しみを決して軽んじてはなりません、一方、この迫害、苦しきは、教会がキリストの教えに基く抵抗をしたから生じたのではなく、キリスト教をあくまで信用しない日本政府と日本社会によってもたらされたのだという点について、私たちは考える必要があります」(148-149頁)。

戦時下という危うい《階段》を踏み外すことなく、その足場がどのような困難を抱えていたかを見届けようとする。声高な批判や弾劾とはトーンを異にした、物静かな問いかけは傾聴に値しよう。

戦後そして第二バチカン公会議「後」については、他を割愛して下の一か所に絞る。

⑦「戦後、日本が最も困難な状況にある時に来日し、救援と宣教に尽力した宣教師たちの働きに対しては、

いくら感謝してもしきれません。しかし、多数の司祭・修道者が莫大な資金と共にやってきたことによる弊害、例えば、外国人宣教師への依存体質の増大(中川明)や大局的なヴィジョンを欠いた宣教の「分団(断)化と分散化」(森一弘)などのマイナス点は、日本の教会の弱点でした」(159頁)。

私自身、「教育事業が一大発展を遂げ[たカトリック教会の]、五〇年代から六〇年代前半は、その点において明るさと勢いがありました」(165頁)と評される時代に生まれ育ち、イエズス会が広島に開設した中高に学んだ。公会議が終わった1965年に受洗し、「信徒使徒職」というスローガンに鼓舞はされたものの、上京して「蒸発」しかけている。そんな前歴をもつ者ゆえ、⑦の分析は余所事ならぬ「頂門の一針」として受けとめざるを得なかった。

では戦後日本の教会の弱点をどうやって克服していけばいいのか。そのヒントは最終章の結びに書き込まれている。

⑧「日本人[の信仰心や宗教への関心]が渴いていないわけではなく、信仰心は眠っているだけで、魂に響く生き方を目にすれば、また、びたっとくる言葉で語られれば、反応して受け取る人々はいるので。／そのような人々に対して、今の日本の教会は福音を差し出すことができるでしょうか。[……]そこが問われているのだと思います」(208頁)。

歴史家シスターに導かれて《時の階段》を昇降した読者をして、「魂に響く生き方」や「びたっとくる言葉」を探り求めさせ、「福音を差し出す」企てへと招き入れる——カトリック教育の実践と研究に携わる心ある方がたに、広く本書を薦めるゆえんである。

三好千春著『時の階段を下りながら—近現代日本カトリック教会史序説』オリエンズ宗教研究所(〒156-0043 東京都世田谷区松原 2-28-5), 2021年4月刊, B6版, 256頁, 本体価格(税別)2,400円